

魅惑のハニー・ボイス

——とうとうこの日がきちゃったよ……

残暑が厳しい八月下旬のある日。都内某所に建つ商業ビルの前で、私——塚口真帆はビルの一階から最上階まで、視線を何度も往復させていた。

ゴクリと喉が鳴る。

今朝から続いていた緊張感が、ここに来てピークに達したらしい。

汗ばむ手をハンカチで何度も拭いて、資料の入ったファイルケースを抱え直す。腕時計に視線を落とすと、針は待ち合わせ時刻の五分前を指していた。

……いつまでもここに居るわけにはいかない。

「あ、あー。あーあー。……よし」

喉の調子を確かめ、大きく深呼吸して、私は目の前の自動ドアへと一歩踏み出した。

私の勤め先である堀中製菓は、菓子業界において国内シェア上位をキープする食品メーカーだ。

私はバスケットやソフトケーキなどの商品企画をする課に所属している。社会人二年目の二十三歳といえは、新卒扱いからは卒業したものの、まだまだ駆け出しの未熟者——そんな私がなんの因果か、この度ラジオに出演することになってしまった。

堀中製菓はあるラジオ番組のメインスポンサーで、自社の商品をPRするための放送枠を持っている。そして、ときどき社員をそのコーナーにゲスト出演させているのだ。

今回は九月末に発売する新商品の宣伝にともない、私の所属する課から出演者が選ばれることになった。

聞けば、課の先輩達の何人かはラジオ出演の経験があるそうだ。

だったらその中の誰かがまた出演すればいいんじゃない？ とか、先輩方を差し置いて下っ端の私が出演？ とか、いろいろと思うところはあつたんだけど……

そのラジオ番組のパーソナリティの名前を聞いて、私は思わず興味を示してしまった。

それを主任に目ざとく見られていたようだ。

「今回は塚口が行つてこい」という主任の一言で、私に白羽の矢が立った。

収録は全部で四回。初回のトーク内容については課内で打ち合わせ済みだし、喋るコツも教えてもらった。もちろん台本もあるから、準備は万全だと思う。

だけど……あの、人に対面するのだと思うと、緊張は高まるばかりで、いくら自分に「大丈夫」と言い聞かせても、心はなかなか落ち着いてくれない。

……とにかく今日一日を、いや、今から収録が終わるまでの一時間くらいを無事に乗り切ることだけ考えてみよう。

私はファイルケースを胸にギュッと抱き締めて、ビル内のエレベーターに乗り込んだ。

四階で降りると、エレベーターホールの正面にラジオ局の受付がある。

「堀中製菓より参りました、菓子食品マーケティング部二課の塚口と申します。ラジオ番組出演の件で、十三時に志波幸弥様とお約束しております」

「いらつしやいませ。こちらに必要事項をご記入いただけますか？」

受付で簡単な手続きを済ませ、女性局員に先導されながら進む。

ほどなくして、パーティションで仕切られたブースに通された。

……いよいよだ。

もうすぐ本物の志波さんに会える。

ううっ、ドキドキする……！！

私がかここまで緊張する理由……それは生まれて初めてのラジオ出演だからということ以上に、憧れていた人物に会えるからだだった。

——志波幸弥。

私は彼のことを、一方的に知っている。いや、正確に言うとな彼の“声”だけを知っていた。

志波さんは、私が高校生の頃に愛聴していたラジオ番組の、メインパーソナリティを務めていた

人なんだよね。

六年前……深夜帯に放送していたその番組を、当時高校三年生だった私は、毎週欠かさず聴いていた。

机に置いたポータブルラジオからイヤホンを経て伝わってくる彼の声は、耳に心地よく響く低音で、受験勉強で疲れた頭を優しく癒やしてくれた。

声だけじゃない。彼の言葉そのものにも共感していた。選曲のセンスも、曲を紹介するときの短いコメントも大好きだった。

いつもハキハキと喋っていた彼は、たまに吐息交じりの色っぽい声を出すことがあった。それを不意打ちで聴くと、まるで耳元で囁かれているような変な気分になった。胸がキュウツとなって……参考書の上に突っ伏して身悶える、なんていうこともあった。

大学に進学してからは生活のリズムが大きく変わり、ラジオを聴く機会もすっかりなくなってしまうけれど……その頃抱いていた憧れやときめきは、今でも胸に残っている。

「まさか仕事で志波さんに会えるなんて……」

はあ、と小さく息を吐く。

きっと今の私は、気持ち悪いニヤけ顔になっているだろう。

その一方で、会うことへの怯えや躊躇いのようなものも感じている。

当時、私は志波さんの素顔やプロフィールといった個人情報も、あえてなにも調べずにいた。

自分の理想から大きく外れていたなら、がっかりしてしまう。それが怖くて、いつも“理想の大人の男性”を想像しながら、彼の美声に耳を傾けていた。

……本物の志波さんは、どんな人物なんだろう。

普段の明るい声の通り、笑顔が似合う人かな。

それともあの囁き声に似合う、色っぽい雰囲気の人かな。

歳はいくつくらいだろう。

声は若いお兄さん風だったけど、実は意外とおジサマだったという線もあり得るよね。

「……うー……!」

どうしよう。彼について考えていたら、ますます緊張してきた……!

「だ……大丈夫、大丈夫。台本を読むだけ。失敗しても、やり直しはきくし」

志波さんがメインパーソナリティを務める番組は二時間枠の生放送。

けれど、私が出演するゲストコーナーは二十分間だけで、しかもそこだけは事前収録だ。

「台本の通りに進めば、二十分で終わるはず」

リテイクがなければ、の話だけ。

……ああ……やっぱり心配だ。上手く喋れるかな。

私、普段の滑舌は悪くないほうなのに、余裕がなくなると囁み囁みになっちゃうんだよね。

「はあ……」

いろいろな意味でドキドキしすぎて、頭がポーツとしてくる。

そんなタイムिंगで——

「すみません、お待たせしました」

狭いブースの中に、懐かしいあの美低音が響いた。

「っ！ あ、はい、いえ！ 大丈夫です！」

慌てて椅子から立ち上がる。

お辞儀して顔を上げたところで、私はガチッと固まってしまった。

背の高い男性がこちらに歩み寄り、小さなテーブルを挟んで向かい側に立つ。

『志波幸弥のSaturday joyful night』でパーソナリティをさせていただいております、志波です」

この人が……志波さん。

「……は、じめ、まして」

頭の中は真っ白で、繰り返し練習してきた挨拶の言葉が全然出てこない。『はじめまして』と言

えたことすら奇跡に思えるくらいだ。

だって……憧れていた人との初対面ってだけでも凄いことなのに……

志波さん、イケメンにもほどがあるでしょ!?

ぱっちり二重の、黒目がちな目。

整った眉に、スツと通った鼻筋。

ゆったりと弧を描く、形の良い唇。

髪型はショートマッシュユっていうのかな。色は明るめのココアブラウン。ミックスパーマなのか

クセ毛なのか、毛先がクルツとしている。

全体的な雰囲気としては、華やかな甘い系のイケメンだ。

しかも背が高い。足も長いな……

サマーニットと細身のパンツというシンプルな服装が、スタイルの良さを引き立てている。

こちらを真っ直ぐ見つめてくる瞳を呆然と見上げた。

……歳は私より少し上の、二十代後半くらいかな。

美声な上に、こんなに格好良いなんて反則……

胸が高鳴ってしまい、未だに言葉が出てこない。

数十秒か、もしかしたら一分以上も見つめ合って——ようやく頭が再起動した途端、羞恥心が湧

き上がる。

わ、私は会社の代表としてここに来たのに、仕事相手にポーツとなったらマズいでしょ!

「ご挨拶もなしに、すみません！」

慌てて頭を下げ、おたおたしながら社名と所属部署を告げる。

「こちらこそ申し訳ありません」

すると何故か志波さんからも謝られてしまい、焦りに拍車がかかった。

「いえ、あの——」

「あまりにお美しくて、言葉を失っていました」

美低音が紡いだ言葉を耳にして、名刺ケースを手に再び固まってしまう。

「え？」

「はい？」

志波さんは笑顔で僅かに首を傾げる。

あれ？ なんだか仕事中には絶対耳にしないはずの艶めいた声色で、この場にそぐわない気障なセリフを言われたような……？

しかし、そのまま何事もなかったかのように、自然に名刺交換の流れになる。

「改めまして、志波です。よろしくお願いたします」

妙に色っぽく聞こえた志波さんの声も、普通の明るい声に戻っていた。

「……塚口です。よろしくお願いたします」

名刺に並ぶ肩書きを見て、ちよつとびつくりしてしまった。

ラジオパーソナリティの他に、テレビ番組でナレーターをしているのは知ってたけれど……志波さんってアナウンススクールの講師もしてるんだ。

「志波という名字、たまに珍しがられるんですが、芸名ではなく本名なんですよ」

向かい側から柔らかな声が届く。私が名刺をまじもと見ていたのを、彼は自分の名字が珍しい

ためだと解釈したらしい。

私は視線を上げ、笑顔で答えた。

「素敵なお名前ですね」

「真帆さんというお名前のほうが、ずっと素敵ですよ」

「……え？ また色っぽい声で褒められた？」

「いやいやいや。私、どこからどう見ても普通女子だよ？」

『美しい』とか『素敵』とか、今まで言われた記憶がないんですけど……？

困惑して思わず眉根を寄せる。

すると彼のほうも、何故か怪訝そうな表情を浮かべた。

「……んん？ なんなの、この妙な空気は……？」

「失礼ですが、ラジオ出演のご経験は？」

声色を柔和なものに戻した志波さんは、そんなことを聞きながら私に着席を促す。私が座るのを見て、自身も正面の椅子に腰掛けた。

「え、あ……ありません。初めてです」

「やはりそうでしたか。かなり緊張されているご様子でしたので……」
彼に言われて、ハツとした。

「……そういえば私、緊張してたんだった。」

志波さんが放った褒め言葉があまりに衝撃的だったので、あれほど高まっていた緊張が全て吹き飛んでしまっている。

もしかして、志波さんは私の心を解そうとして、わざと驚かせるようなことを言ってきたのかな。彼をチラリと窺うと、私を見つめる優しげな眼差しに気がついた。

……うん。きつとそうだ。

過剰な褒め言葉は、私をリラックスさせるためのリップサービスだったのね。

そういうことなら、ありがたく受け取っておこう。

「今日は初回の収録なので、ディレクターの松尾と一緒に挨拶させていただきたく予定だったんですが、彼の到着が遅れるそうなんです。塚口さんをお待たせするのも申し訳ないですし、先に二人で打ち合わせを始めてしまっても良いですか？」

「はい。不慣れで恐縮ですが、精一杯頑張ります」

私がしっかりと答えると、志波さんの顔が柔らかく綻ぶ。

「ありがとうございます。では早速ですが、先日お送りいただいた台本について——」

小さなブースの中で、憧れの志波さんと顔を寄せ合うようにして打ち合わせを始める。

志波さんのお陰で、私はすっかり余計な力が抜けて、自分の仕事に集中できるようになっていた。しかし——彼から追加の爆弾が投下されたのは、収録の説明が一通り終わった直後だった。

「こんなに綺麗な女性と一緒にお仕事させていただいて、とても光栄です」

吐息交じりに囁かれた言葉に、私はまた固まる。

……これも志波さんの厚意によるものなんだろう。

でも、仕事モードに入っているときに、ナチュラルにお世辞を挟むのはやめてほしい。

私は恐る恐る切り出した。

「……あの、お手数をおかけしてすみませんでした。でも、もう大丈夫ですので」

志波さんが小首を傾げる。

「大丈夫とは？」

「え？ ですから、身に余るお世辞のお陰で、緊張はだいぶ薄れましたので、これ以上言っていただかなくても……」

「お世辞じゃありませんよ」

彼の整った顔がズイッと間近に迫る。

反対に、私は少し仰け反ってしまった。

「緊張が解れたのは良いことですが、俺はそれを狙って言ったわけではありません。綺麗だと思っただけからそう言いました。……塚口さんの彼氏が羨ましいな」

「いえ、綺麗なんかじゃありません。それに彼氏もいないですし」

「本当ですか？」

志波さんの顔がパツと輝いた。

「こんなに素敵な女性を放っておくなんて、塚口さんの周りの男は見る目がないですね。俺、彼氏に立候補してもいいですか？」

「ええっ!？」

彼氏に立候補!? つまり、あの褒め言葉のラッシュは本心だったってこと……?？」

でも、ちょっと待って。

私にとって志波さんは憧れていた人だけど、彼にとつての私は初対面の仕事相手でしかないわけ。

なのに交際を申し込んでくるなんて唐突すぎるでしょ!

どう考えても、場所と相手を間違えているとしか思えない。

それとも彼くらしいイケメンになると、こういうセリフを初対面の女性に言うのって普通なの?

私は少しづつ姿勢を元に戻しながら、おずおずと志波さんの表情を窺った。

すると彼は照れたようにはにかみ、片手を首筋に運ぶ。

「……っと、すみません。先走りすぎました。とりあえず台本の読み合わせに入りましょうか」

台本を開いて読み始める彼の態度はとても自然だ。

でも私のほうは、正直わけが分からないことになっていた。

台本を読み始めた自分の声も、どこか遠く感じる。

褒められて嬉しい気持ちはあるんだけど、喜びきれないというか……逆にちよつとショックなの

かもしれない。

高校生の頃、ラジオの電波越しに想いを寄せていた相手が、まさかクサイセリフをナチュラルに言えちゃう系の人だったなんて……

外見的にはプラス方向に予想外だったんだけど。

チャラい発言を次々と浴びせられて、高く盛りすぎた理想像がガラガラ崩れていくというか……

イメージ、違ったなあ……

「——この、『新商品を食べた感想を言う』という部分なんですけど、そのお菓子の実物はお持ちですか? 収録中に食べることはできませんので、いま試食させていただければ……塚口さん?」

怪訝そうな声で名前を呼ばれてハツとした。

「ッ、すみません! 持ってきました!」

慌ててバッグの中を探る。

新商品のソフトケーキを取り出して、テーブルの上にそつと置いた。

「いただいても?」

「どうぞ。資料はこちらです」

商品について簡単に説明しつつ、お菓子を口に運ぶ志波さんをチラチラと窺う。

今回紹介するお菓子には、企画立案から携わっている。同僚達と何度も話し合い、試食を繰り返ししてきた。開発期限ぎりぎりまで甘さの微調整をして出来上がったのがこの味だ。

社外の人に初めて食べてもらえるということで、私は物凄くドキドキしていた。

志波さんの口から感想が出てくる前に、自分の口から心臓が飛び出てしまいそうだ。

「——分かりました」

真剣な表情を浮かべた彼は、たった一言しか言ってくれなかった。

えっ、それだけ？

「あの……お味はいかがでしょうか……？」

「美味しいですよ」

志波さんはお菓子を食べ終わると、手元の台本にサラサラとなにかを書きつけている。

『美味しい』と言ってもらえて嬉しく思う一方で、『美味しい』としか言ってもらえなかったことにちよつとがっかりしてしまう。

私は無意識に表情をくもらせていたのだろう。

志波さんが私を元気づけるかのように、こちらに向かって小さくウインクした。

「詳しい感想は収録のときにお答えしますよ」

「……はあ」

この人、仕事まで気障なんだ……

それから私達は台本の残りの部分を読み合わせ、遅れて到着したディレクターの松尾さんと挨拶してから、打ち合わせブースを出た。

「うちのラジオ局にはスタジオが三つあります。あちらの奥にあるのが生放送用のAスタで、今は昼の帯番組を放送中です。塚口さんに入っていたくスタジオは、こちらにある収録番組用のBスタになります」

メガネをかけた松尾さんは、志波さんと同じ年くらいに見える。

彼に案内されて、ドキドキしながらBスタジオへと足を踏み入れた。

入ってすぐの場所にマイクとヘッドホンの置かれたテーブルがあり、椅子が二脚ずつ向かい合わせに並んでいる。

そのすぐ脇に目をやれば、ノートパソコンがぎりぎり載るくらいの小さなテーブルと、スツールが一つあった。

それにしても狭い。

椅子の数から五名は入るのだろうけれど、志波さんと松尾さんと私がいるだけで既に窮屈に感じる。

四方の壁が凸凹した防音材で隙間なく覆われているからか、圧迫感や息苦しささえも覚えてしまう。

「塚口さんはこちらの席どうぞ。幸弥は定位置に」

「はいはい。あ、塚口さん。良かったらこのクッション使ってください」

「準備ができたら始めるぞ」

松尾さんはスツールに座ってヘッドホンを装着すると、ノートパソコンと周辺機材を手慣れた様子で操作していく。生放送のときと違って、ディレクターも同じ部屋で作業するらしい。

私の正面に志波さんが座り、マイクの位置などをチェックしてくれた。

……かつ……顔が近い……！

打ち合わせのときも互いに顔を突き合わせるような感じだったけれど、今のほうが更に近い。

でも先ほどとは違って、彼の表情は真剣そのものだ。

気障なセリフをにこやかに言い放つ志波さんと、今の真面目そうな志波さん。そのギャップが激しすぎて、私は困惑してしまう。

正直どっちも格好良いけれど、どちらかといったら今の真剣な表情のほうが好きかも……って、なにを考えているの!? 今は事中だから！

私は咄嗟に俯き、うろろると視線を泳がせる。

「——大丈夫ですか？」

「はっ、はい！」

志波さんに声をかけられ、慌てて背筋を伸ばした。

心配そうな表情を浮かべている彼と目が合う。

「もしかして塚口さん、閉所や密室が苦手だったりしますか？」

「……？ いえ、特には」

「スタジオ内の圧迫感に戸惑われるゲストさんって結構多いので……もし辛いようでしたら、扉を開けたまま収録することもできますけど」

「ありがとうございます。でも本当に大丈夫です。ちょっと緊張がぶり返しちゃいまして」

「そうですか。なにかあつたら遠慮せずに言ってくださいね」

「はい」

「始めてもいいですか？」

そう尋ねてきた松尾さんにも「はい」と返事をする。

彼と志波さんがアイコンタクトを取った。いよいよ収録スタートだ。

松尾さんが操作する機材から再生されたタイトルコールに続き、軽やかな音楽が流れ始める。そのタイミングで、志波さんがスウツと息を吸い込んだ。

そして——彼のまとう雰囲気が一変した。

私は思わず目を見開く。

志波さんの口から発せられる声は、耳によく馴染んだあの美声だ。

軽快な口調も昔と全然変わっていない。

でも、この空気感。

彼から発せられる、ピンと張りつめたオーラ。

初めて感じたそれに……圧倒されずにはいられなかった。

『——ではここで、今夜のゲストをご紹介したいと思いまーす』

志波さんが私の名を告げ、こちらに「どうぞ」とハンドサインを送る。

私はハッと我に返り、軽く息を吸い込んだ。

『塚口です。よろしくお願ひします』

最初の一言を囁まずに言えたことで、ほんの少しだけ肩の力が抜けた。

ふと柔らかな気配を感じて顔を上げる。

志波さんは私と目が合うと、小さく頷く。そして台本通りの内容を淀みなく話しながら、私を安心させるように親指を立てた。

……さすがプロ。

ガチガチに固まった私とは全然違う、余裕たっぷりな態度だ。

そんな彼を見ていると、雰囲気呑まれた心が少しずつ落ち着いていく。緊張も若干和らいだよう気がした。

収録は台本に沿って流れるように進んでいく。

ほどなくして、私達の会話は新商品のことへと移った。

ここからが本題——私が開発に携わったお菓子の紹介だ。

『今回ご紹介するお菓子は……じゃらじゃらじゃらじゃら、ばん！』

志波さんのセリフに続いて台本を読み上げる。

『ソフトケーキの人気シリーズの新フレーバー、モンブラン味です。滑らかな舌触りのマロンクリームをしっとりしたスポンジで挟んで、それをチョコレートでコーティングしています』

よし、囁まなかったし声も震えなかった。この調子で気をつけて話そう。

そう思った次の瞬間——

『俺、実は事前に味見させてもらったんですよ』

志波さんの口から台本にないセリフが飛び出し、私はギョツとして顔を上げた。

彼はこちらをジッと見つめたまま、思わせぶりの笑みを浮かべる。

私は予想外の展開にドキドキしながら、次の言葉を待った。

『まずねー、中のクリームが超美味しいです。凄く濃厚で、栗の甘さを前面に押し出していますね。』

「ザ・栗！」って感じかな。ところで塚口さん、これ、スポンジ部分にもマロンリキュールかなにかで風味つけてありますよね』

『っは、はい、そうなんです。——ッ!?!』

いきなり問いかけられて、声の上擦ってしまった。

ヤバイ！

サーッと青褪めた私の前で、志波さんが間を繋ぎながら台本の隅をつつく。

そこには「開発エピソードがあったらどうぞ」とペンで走り書きされていた。

どうやら彼は、打ち合わせの時点でこうするつもりだったらしい。

『えっと、中のマロンクリームは——』

私はクリームの甘さやマロンリキュールの割合、スポンジの厚さについて試行錯誤したエピソードを明かしていく。少したどたどししかったけれど、志波さんの巧みな話術に引つ張られて、なんとか説明を終えた。

『コーティングに使っているチョコはちよつとビターテイストですね。クリームの甘さを絶妙に引き立てているこのチョコにも、開発スタッフの方々のこだわりが詰まっていそうですが？』

志波さんが再び台本の隅をトントンとつつく。

え、また喋っていいんですか？

『チョコレートの部分は——』

私は開発にかけた情熱がリスナーさんに伝わるよう、一生懸命話した。

一通り話し終えたタイミングで、彼が引き継いでくれる。

『——最近のお菓子って甘さ控えめのもも結構出てますけど、今回の新商品は甘みがかなり濃厚ですね。でも甘さと苦さのバランスが良いお陰でクドくは感じないです。だから俺的には「疲れた、甘い物が食べたい！」ってときに、ぴったりのお菓子じゃないかなって思います』

『ありがとうございます』

そこから志波さんは台本通りの流れに戻し、コーナーのまとめに移行した。

私は台本を目で追いつつも、ニヤニヤ笑いを堪えきれない。

こんなに褒められるなんて思わなかった。こだわった部分を汲み取ってもらえるなんて思わなかった。

仕事上のお喋りだと分かっている……嬉しい。

私の言いたいこと、伝えたいことを、彼は絶妙なトークで全部引き出してくれた。

開発に費やした努力や苦労が全て報われていくような、不思議な達成感が胸の中に満ちている。心地好い感覚にふわふわしていたら、ふと斜め前方に置かれた時計が目に入った。

気がつけば、収録の終了予定時刻まで残り一分を切っていた。

収録はリテイクなしで無事に終わった。

ヘッドホンを外して資料や台本をまとめ、Bスタジオを後にする。

今回の収録日時を確認してから、二人に頭を下げた。

すると志波さんが私の隣に並んだ。

「塚口さん。俺、途中までお送りしますよ」

松尾さんに見送られ、志波さんと二人でエレベーターホールへ向かう。

その途中、大仕事を無事に終えられて安堵したからか、思っていたことがポロツと口から出てしまった。

「……プロって凄いですね」

頭一つぶんにある志波さんの顔が、不思議そうに傾く。

「その……お菓子を一つ食べただけで、あれだけの感想が言えちゃうのって、凄いなって。台本には『新商品を食べた感想を言う』としか書いてなかったの……」

私は今日の収録で感じたことを正直に口にした。

こちらを見下ろす彼の顔が柔らかに綻ぶ。

「塚口さんこそ凄いなと思いますよ」

「私ですか？」

「今日の収録は塚口さんに随分助けられました。俺が味の感想を言って、発売日の告知して、っていう内容だけだと、どう考えても尺が余っちゃいますから」

「それで私に開発エピソードの話振ってくださったんですか」

「ええ。……やっぱりご存じなかったんですね」

今度は私が首を傾げる。

「この台本を用意した方は、恐らく塚口さんに沢山喋ってもらうことを前提に作られていますよ」

「えっ」

「あえて自由度が高めに設定してあると思いますか、思いつくまま楽しく語ってほしいというような、上司の方々の意図を感じました。あくまで俺の推測ですけどね」

聞けば、私の会社からゲスト出演者が来る際、志波さんとはときどきこういうタイプの台本を渡されることがあるらしい。

「課長や主任からはなにも……」

「素晴らしいご判断だと思いますよ。実際、台本を読み上げているときより、ご自身で考えて喋っているときのほうが、塚口さんの声が弾んでいましたから」

「もしかして、打ち合わせでお菓子の感想を言ってくださらなかったのは……」

「事前に『こういう感想を言うので、こういう風に返してください』って提案してしまうより、本番で感想を伝えて新鮮なりアクションを取ってもらったほうが、塚口さんの声が活きるような気がしたんです。アドリブを入れたのも似たような理由で、そのほうが会話も盛り上がるかなと思います」

プロの視点で素人の私を観察して、そう判断してくれたのか。

そして結果、成功したと。

やっぱりプロって凄いなあ……

「でも、私が言葉に詰まってしまう可能性は考えなかったんですか？」

「生放送じゃないのでリテイクできますし、ちょっと間が空いたりしても編集で詰められますから。その辺りは松尾ディレクターの腕の見せどころですね」

「なるほど……」

何度も頷いていると、エレベーターの扉が軽やかな音を立てて開いた。

私に続き、志波さんも無人のエレベーターに乗り込んでくる。

わざわざ一階まで送ってくれるようだ。

奥の壁際に立つと、その向かいに立った志波さんが、ゆっくりと身を屈めた。私の顔をジッと見つめ、不意に甘い表情を浮かべる。

——密室を満たす空気が、一瞬で色めいたもの変わった気がした。

「し、志波さん？」

「開発にかけた情熱を一生懸命語る塚口さん、とても魅力的でした」

吐息交じりの声は、妙に魅惑的に響いた。

「あ、りがとう、ございます。お世辞でも嬉しいです」

「お世辞？ ……やっぱり、塚口さんには通用しないのか……？」

志波さんがなにかを呟いて更に近づいてくる。

ちよっ……ち、近いです！

思わずジリッと身を引くと、背中が壁にぶつかった。

大きな手が私の顔の右側にトン、と突かれる。

艶やかな笑みを浮かべた志波さんと、至近距離で見つめ合う。

「塚口さんがあまりに素敵だから、言わずにはいられないんです……出逢ったばかりなのに、俺は

こんなにも貴女に惹かれてる」

色気がたつぷり含まれた美低音が囁く。

私はその言葉の意味を呑み込むより、彼の行動のほうが早かった。

志波さんがそっと目を伏せ、眼前に美貌が迫る。

間を置かず、唇に柔らかなものが押し当てられた。

「っ!？」

「……可愛い」

一旦離れたそれがまた重なる。

——キス、された。

………キスされてる!?

理解が追いついた途端、私は無意識に右手を上げていた。

パン!

「——ッ！」

左頬に平手打ちをくらった彼が、よろめくように一步下がる。

「せ、セクハラです！」

私は彼を引っぱりたい右手で、バクバク跳ねる胸をギュッと押さえた。

志波さんは何故か、目を見開いて呆然としていた。

数秒後、その顔に戸惑いの色を浮かべる。

こちらに探るような視線を向けているが、その意味は分からない。

私は顔を熱くしたまま、志波さんをキッと睨み上げた。

ほどなくしてエレベーターが一階へと到着した。

私はおさなりに頭を下げ、逃げるようにエレベーターを飛び出すと、そのまま早歩きで出入口へ向かった。

自動ドアが開いた瞬間、ムワツとした熱気が全身を包む。けれど、今の私にそれを気にする余裕はない。

建物の角を曲がり、出入口が完全に見えなくなったところで、近くにあった街路樹の陰によろめきながら入る。

ひんやりとした幹に片手を突いた直後、その場にへなへなとしゃがみ込んでしまった。

「な、なんなの……え、ありえないでしょ、待って、えーと……」

今更のように頭の中が混乱してくる。

耳に残る色っぽい声の余韻と、唇に残る柔らかな感触が消えるまで、私は立ち上がることができなかった。

2

五日後の土曜日の夜、私の声は無事にラジオの電波に乗った。

そして今日は月曜日。私は会社で通常業務をこなしている。

初めてラジオ局を訪れた日からちょうど一週間。

気持ちを落ち着けるには十分な時間が経ったはずだ。でも未だに志波さんのことを『気障！』と引ききみに見る私と、『格好良かった！』とポワンとしちゃっう私が、胸の中でせめぎ合っていた。

……気障な言葉については、まあ辛うじて許容できる。

ああいうセリフをサラッと口にできるのは、きっと志波さんが人目を引く華やかな外見の持ち主だからだろう。

いかにも言い慣れていそうだったから、この予想は恐らく合っていると思う。

見た目の格好良さと、美低音の魅惑的な声があるからこそ許されるんだろうな。

私は自分の席から、そっと周囲を窺った。

数人の社員が、少し離れたところにある主任のデスクを囲み、新商品のパッケージデザインについて話し合っている。

……もしあの気障きざざな言葉の数々が、同僚や上司の口から囁ささやかれたものだったら——
ドン引きだな。うん。

想像しただけなのに、ゾワゾワツツとしてしまった。

鳥肌の立った腕をゴシゴシと擦こする。

そんな私の様子が目に留まったのか、背後から声をかけられた。

「塚口つかぐちっちゃんも寒いの？」

「あ、根谷ねやさん」

振り向いた私は、苦笑しながらペコリと頭を下げる。

話しかけてくれた彼女——根谷香与子かねやかよこさんは、微笑みながらその手に持った膝掛けひざかを軽く上げた。

根谷さんは私の三つ上の先輩社員だ。この菓子食品マーケティング部二課に配属されて以来、とてもお世話になっている。

ここでの仕事内容は全部彼女から学んでいると言っても過言ではないくらいだ。

根谷さんのことは一人の女性としても尊敬している。特に今のような、人のちよつとした仕草を見て気を遣やつてくれる細やかさは、同性として見習いたい。

「さつき高村主任たかむらがエアコンの設定温度を下げてたから、ロッカーから急いで膝掛けひざかを持ってきたの。一つ予備があるけど、良かったら使う？」

「大丈夫です。ジャケットを着てますし、手持ちの膝掛けひざかもあるので」

そう返事をして、デスクの下にある自分の膝掛けひざかを指差す。

根谷さんは頷くと、私のほうに歩み寄ってきた。

「外回りから戻ってきて暑いのは分かるけど、ちよつと温度下げすぎだよなー？」

「おーい根谷ー。聞こえてるぞー」

「ヤダ高村主任、地獄耳じごくみみですね！」

「お前、最初から聞かせるつもりだっただろう」

「あ、分かっちゃいました？」

根谷さんと主任のかけ合いが始まる。

これは二課の日常としてすっかり定着している光景だった。

当人達はポンポンと文句を言い合っているものの、険悪な雰囲気は全くない。

以前根谷さんから聞いたんだけど、どうやら彼女、主任のことが好きみたいなんだよね。

対する主任のほうも満更まんごではなさそうに見える。実際今も近くにいる男性社員から「痴話喧嘩ちわげんかは早めに終わらせてください」とか言われて、ちよつと照れているし。

……恋愛かあ。いいなあ。

席に戻って膝掛けひざかを広げる根谷さんと、男性社員達との話し合いを再開させた主任。そんな二人を交互に眺め、私は小さく溜息をついた。

資料を目で追い、キーボードの上で指を走らせながら、頭の中では別のことを考える。

——私には恋愛経験がほとんどない。

中学と高校は女子校だったから出会いそのものがなく。大学生の頃ようやく彼氏と呼べる人ができたけれど、交際は二週間もたなくて……それからはずっとフリーだ。

彼氏が欲しいと思いつけているのになかなかできないのは、友人曰く『私の理想が高すぎるせい』らしい。

私が相手に求める条件は、優しいことと、誠実なことの二つだけなんだけどな……

理想といえば、昔の私はラジオでリスナーの相談に乗る志波さんのことを、とても真摯で誠実な人だと感じていた。

だからこそ憧れていたんだけど……

本物の彼は、あんなことを平気でしてくるくらいだから、とても誠実とは言えないよね……

「はあ……」

手を止めて、椅子の背もたれに上半身を預ける。

電話の応対をする根谷さんの声を聞きながら瞼を閉じると、先週初めて見た志波さんの姿が頭に浮かんだ。

……いくら想像より素敵な外見だったとしても、優しい言葉をかけてくれたとしても、初対面の女性にいきなりキスしてくる人に、誠実さんなんて求めるだけ無駄なんだろうな。

でも、平手打ちは明らかにやりすぎだ。

言葉や態度で示すとか、他にいくらでもやりようはあったのに、どうして志波さんの頬を思いつきり引っぱたいちゃったんだろう。しかもその後、全力で逃げちゃったし。

ああ……気が重い。

初回の収録に行く前は、ドキドキとワクワクでいっぱいだった。けれど今は、とにかく気まずい。志波さんは私のこと、絶対に暴力女だって思ってるよね……

「塚口ちゃん。お電話だよ」

根谷さんに呼ばれて、意識がパッと現実に入り替わった。姿勢を戻してそちらを向く。

そこで私は根谷さんの様子が妙であることに気がつき、首を傾げた。

「……？」

根谷さんは仕事のできる先輩だ。電話を取り次ぐときは、相手の名前やざっくりした用件などを確認した上で、それを私に伝えるはず。

なのに彼女は今、頬を上気させてポーツとしている。いつも明るく輝いている瞳も、熱っぽく潤んでいるように見える。

一体なにが……？

「どなたからですか？」

「志波さん、という方から……」

え、志波さん!? 用件はなんなの？

根谷さんの声が上擦^{うわす}つているのも気になるけれど、相手を電話口で待たせるわけにはいかない。私は直前までの考えことや疑問を一旦胸の中に収め、受話器を手に取った。「お待たせいたしました。塚口です」

『……ああ、塚口さん』

艶^{うぶ}をはらんだ声に、ドキン、と心臓が跳ねる。

月曜日の真っ昼間からなんて声を出してるのよ、この人は……！

『一週間ぶり。相変わらず可愛い声だね』

早速^{さっさと}甘いセリフを浴びせられて、耳と胸の奥がムズムズする。

頬を叩かれたこと、怒ってないのかな。

……もしかして、キスにまつわる一連の出来事を全部なかったことにされてる!?

お、落ち着け、私。今はとにかく仕事モード！

『……お世話になっております。恐れ入りますが、まずご用件^{うけが}を伺^{うかが}ってもよろしいでしょうか？』

『そんなに畏^{かしこ}まらないですよ』

『仕事ですから』

『つれないなあ』

努めて冷静に発した言葉は、必要以上にツンツンしてしまった。

しかし志波さんは、私の塩対応にめげるところかクスクス笑っている。

『……っ！』

私は思わず受話器を少し耳から離れた。

電話でのやり取りなのに、まるで吐息^{といき}交じりの囁^{ささや}きを直接耳に吹き込まれたようで、なんだか変な気分になりそうだ。

そんな風に考えていると、志波さんが声の雰囲気ガラリと変化させた。

『先週は初回の収録にお越しいただきまして、ありがとうございます。第二回の収録ですが、先日お伝えしました通り、明日の十三時から行^{おこな}う予定です。念のためもう一度確認をと思^{おも}いまして、こうしてお電話^{でんわ}させていただいたのですが……』

『……それはご丁寧に。ありがとうございます』

無意識に返事をしてた。社会人としての癖のようなものだけど、お陰で助かった。

もう、なんなの!? 内容も口調も声色^{こゑいろ}も、さつきとギャップありすぎでしょ！

『第二回も塚口さんのおいでになるんですね?』

『はい。そのつもりですが』

『……良かった』

『……?』

『いえ、実は次回収録分の台本なのですが、ちょっとご相談したい部分がありまして。詳しくは明日の打ち合わせのときにお話しします』

その後は普通のやり取りが続き、何事もなく電話を終えられた。

けれど……彼が真面目な口調で話をしている最中も、私の心はずつとざわついたままだった。

昼休み。

根谷さんとランチに出かけた私は、彼女の様子がおかしいことを確信した。

午前中……正確に言えば志波さんからの電話を取り次いだ辺りから、根谷さんはずっとぼんやりしている。業務をテキパキとこなす普段の彼女を知っているだけに、近くにいた同僚達もその様子に困惑していた。

主任に呼ばれても返事をしない根谷さんなんて、根谷さんじゃない。

……原因は、きつとあの電話だ。

そう思って、詳しい事情を聞き出すために、外に連れ出したんだけど――

「志波さんって素敵ね……」

うっとりとした表情の根谷さんが口にした言葉に、私は飲んでいたアイステイーを噴き出しかけた。

ゲホゲホとむせる私を前にしても、彼女は相変わらずポーツとしている。

どうやら根谷さんは、電話口でちよつとお喋りしただけで、彼に好意を抱いてしまったらしい。

「一体どんなことを話したんですか」

『『知的な声ですね』って、褒めてくれたの。あとは秘密……』

根谷さんは、ほう、と吐息を漏らしながらパスタをフォークに巻きつけている。

そんな彼女に私は恐る恐る聞いてみた。

「主任のことは、もういいんですか……?」

「……主任?」

「その電話の前まで空調のことでポンポン言い合ってた根谷さんが、突然ぼんやりし始めちゃったから、『調子が悪いのか? 大丈夫か?』って凄く心配してましたよ。汗をかいてるのにクーラーの温度を上げてくれましたし」

私は真面からジッと見つめ、彼女の様子を窺う。

根谷さんは沈黙したまま。パチ。パチと目を瞬かせた。

ほどなくして、その表情が普段の快活なものへと変わる。

「……高村主任、そんなに心配してくれてたんだ。悪いことしちゃったな」

その言葉を聞いてホッとした。

良かった。いつもの彼女が戻ってきた。

そこで根谷さんが手元に視線を落とし、ギョツとする。無意識のうちに、フォークにパスタを巻きつけすぎていたらしい。

そんな彼女を眺めながら、私もパスタを口に運ぶ。

……志波さんは根谷さんと、どんな話をしたんだろう。打ち合わせのとき私に言ったような気障なセリフを、彼女にも囁いたのかな。さっきの根谷さんの変わりようを見るに、私に言ったものよりずっと魅惑的なセリフで誘惑したのかもしれない。

そんな風に想像した直後、胸の中にモヤモヤしたものが湧き上がった。

……私だけじゃなく、根谷さんまで口説こうとするなんて。

やっぱり志波さんは理想の男性なんかじゃない。軽くてチャライ遊び人だったんだ。

「……別にいいけどさ」

彼が誰になにを言ったとしても、私に文句を言う権利はない。

ましてや彼がどんな女性に興味を持つかなんて、私には関係ないことだ。

だって私は、ただの仕事相手だもの。

——ツキン、と胸の奥が痛む。

けれど、私はその痛みを無視した。

志波さんと会う機会は、あと三回ある。

……その三回だけ頑張ろう。

まず先日の平手打ちのことを謝って、和解できるように努力しよう。

謝罪を受け入れてもらえたら、これ以上彼に深入りしないように公私の線引きをして、ビジネス

ライクなお付き合いをしよう。

私は胸に湧いたモヤモヤをアイステイと一緒に吞み込んで、残り少なくなったパスタを口に運ぶのだった。

志波さんから電話があった翌日。

私は前回とは違う緊張感に包まれながら、ラジオ局のあるビルを見上げていた。

謝罪は、できれば収録前に済ませたい。

二人きりになれるタイミングはあるかなあ……

でも、それって謝るチャンスと同時にピンチでもあるんだよね。なにせ彼は初対面の私に向かって気障なセリフを重ね、キスマでしてきたのだ。

志波さんと二人きりになったときは、いろいろな意味で気をつけなきゃ。

そんな風に、そわそわしつつも気合を入れてラジオ局を訪ねただけ——

今回はディレクターの松尾さんも最初からいて、打ち合わせは拍子抜けするほど普通に始まった。

お陰でピンチは回避できたけど、謝罪のチャンスも逃しちゃった……

内心で頭を抱えながら打ち合わせに臨む。

志波さんが電話で言っていた『相談したい部分』については、松尾さんが説明してくれた。

どうやら前回の放送に関するメールが沢山送られてきていて、それをできるだけ捌きたいらしい。

「一部のメールはゲストコーナー後の生放送の時間に取上げたんですが……」

「聴いてました。番組後半のメール紹介のコーナーですよね」

私は志波さんに頷き返ししながら、先週土曜日の放送内容を思い出し――込み上げてくる気恥ずかしさを誤魔化すように俯いた。

脳裏に蘇ったのは、新商品とは無関係なメールのことだ。

『はい、「ラジオネーム・鳴門ファンバスターン」さん。いつもありがとうございます。「ゲストさんのスリーサイズを教えてください」い？ いやマズいって。そんなの聞いたら俺がセクハラで訴えられるでしょ。っていうか、鳴門ファンバスターンさんって女性ゲストのときは必ずこの質問してくるよね』

……志波さんが常識的なコメントを返してくれて良かった。

でも、本当にそんなメールを送ってくる人がいるの？

冗談にしてもちよつと理解できない。

『次いきまーす。「ラジオネーム・にやおにやお」さん。「志波兄さん、こんばんはー」、はい、こんばんはー。「突然ですが、このセリフを心を込めて言ってみてください」……んー、これは今夜のゲストさんにちなんだ内容だねー。じゃあいきます。コホン。――「甘いお菓子よりも君を食べたいな』』

……あのリクエストは一体なんだったんだろう。

というか、セリフの内容も相当アレだけど、セリフ以上にあの声が反則だった。

聴いた瞬間、部屋のテーブルに突っ伏して身悶えてしまった。高校生の頃と全く同じリアクションを取るなんて、我ながら成長していない。

「――俺が答えられないような、お菓子についての質問なども結構届いてまして」

志波さんの声が耳に届き、意識が現実へと戻る。

彼の隣に座る松尾さんが、メガネのブリッジを指で押し上げながら口を開いた。

「そこでご提案なのですが、台本の内容を全体的に詰めて進め、空いた時間に塚口さんが質問メールに答えるというのはどうでしょう」

志波さんが頷いて私に言う。

「もちろん、俺が全面的にサポートします。進行は任せてください」

「そういうことでしたら、ぜひ」

志波さんの「喋り」への信頼は、先日の収録で増している。

あっさり了承した私を見て、志波さんが思わずといった風に破顔した。

「俺のことを信頼してくださって、ありがとうございます」

「……いえ……」

私はサツと俯く。

彼があまりにも嬉しそうで、笑顔もキラキラ輝いて……眩しくて、とてもじゃないけれど直

視できない。

そこで、松尾さんが新たな資料を差し出す。

「先週届いた質問メールをプリントアウトしたものです。こちらから塚口さんが回答できそうなものを選んでいただければ」

「そうですね、えっと——」

こんなやり取りの後、私は質問メールをピックアップアップして、二度目の収録に臨んだ。

収録ブースでの二十分間は、前回と同様——いや、もしかしたら前回以上にあつという間に終わってしまった。

志波さんが松尾さんのハンドサインに頷き、私に笑顔を向ける。

「——はい、お疲れさまでした」

「お疲れさまでした」

私はホッと息をつき、ヘッドホンを外した。

「ところで塚口さん。昨日電話を取り次いでくれた彼女……あの後どんな様子でした？」

唐突にそんなことを聞かれてドキッとした。

収録が終わって気の緩んだタイミングで尋ねてきたのは、狙ってなのか、無意識なのか。

……志波さんの思惑なんて、私には分からない。

だから平静を装い、テーブルに広げた台本や資料をまとめて立ち上がった。

「……ちよつとポワツとしてましたけど、昼休みには普通に戻りました」

「へえ……好きな相手が、それもかなり強い好意を抱いている相手がいるんですね」

「おい、幸弥」

機材の操作をしていた松尾さんが、私達の会話に口を挟んだ。その表情は訝しげにも、呆れているようにも見える。

でも私は松尾さんの反応より、志波さんの発言のほうに気にかかった。

どうしてちよつと電話しただけで、『好きな相手がいる』なんてことが分かるんだろう。

「何故そう思ったんですか？」

心に湧いた疑問を素直に口にする、志波さんから「ただの勘だよ」と簡潔な答えが返ってきた。

三人で収録スタジオを出て、軽く次回の打ち合わせをする。

その後は前回と同じように局の入口で松尾さんに見送られ、志波さんと一緒にエレベーターホールへ向かった。

……謝罪するなら今だろう。

でも、なかなか言い出せない。

気まずいっていうのも理由の一つだけど……それ以上に、昨日の根谷さんの様子を思い出したことで、胸の中がモヤモヤしていた。

口に出す気はなかったのに、思わずポツリと呟つぶやいてしまう。

「……やっぱり、あの声でなにか言ったんだ……」

その独り言は志波さんの耳に届いてしまったらしい。

エレベーターの呼び出しボタンを押した彼が、私の隣に戻ってきて、不意に身を屈かがめた。

「あの声って……」

耳元に吐息といきがかかる。

「この声のこと？」

——ゾクツとした。

そう、これだ。普通の会話の中に急に織り交ぜられる、色っぽい声。

先週初めて会ったとき、帰りのエレベーターの中で囁ささかれた声。

この魅惑の声を耳に吹き込まれると、状況にかかわらずドキツとしちゃうんだ。

今だって、ある程度は心の準備をしていたし、身構えていたつもりだった。

なのに囁ささかれた途端、心臓は早鐘はやかねを打ち始めてしまう。

「電話口でなを喋しゃべったか、気になる？」

「っ……」

「塚口さんは本当に可愛いな」

吐息といき交じりの美声を受け止めた耳が、カアツと熱を帯おびる。

そのとき——私達の背後でドサリと音がした。

振り向くと、一人の女性が手荷物を床に落としてヘナヘナと膝ひざから崩れ落ちていた。

私を支配しかけていた妙な感情が、驚きへと塗り替えられる。

「大丈夫ですか!？」

私は咄嗟とつさにしゃがみ込んだ。

女性は床に座ったまま、ポーツとした表情で志波さんを見上げている。

……え？ この表情、昨日の根谷さんと同じ……？

私はなおも女性に声をかけようとした。しかし志波さんにグイッと肩を抱かれ、到着したエレ

ベーターの中に連れ込まれてしまう。

「ちよっ……あの人をそのまま放っておくなんて……っ」

「一言だけなら、すぐに立てるようになる。彼女のためにも今は離れたほうがいい」

志波さんは私を一瞥いちめつし、扉の横のボタンを手早く押す。

そして密室になった空間で、溜息交じりに呟つぶやいた。

「はあ……あの人の反応のほうが普通なんだけどな」

「……どうですか」

私は一歩退ひいて、困惑しながら志波さんを見上げた。

すると彼は、笑みを浮かべてこちらを見下ろしてくる。

「塚口さんが俺にとつて特別な存在だつてこと」
……全く意味が分からない。

「打ち合わせのときの真面目な顔も、収録中の楽しそうな笑顔も、今みたいな困り顔も可愛いね。ちよつと顔が赤いところが特に良い」

打ち合わせ中に真面目な顔をするのは当たり前だ。

収録中はお喋りが弾むから、つい笑みが零れてしまうこともある。
困り顔は、まさにいま困っているからで……

頬が赤いのは、志波さんの声に色気がありすぎるからです！

ゾクゾクする耳を押さえ、もう片方の手で胸元のファイルケースをギュッと抱く。

落ち着け、私。彼のペースに呑み込まれちゃダメだ。

この妙に魅惑的な声で繰り返される褒め殺し攻撃は、前回くらつて懲りているじゃないか。

今もちよつとだけグラツとしちゃったけれど、もう流されないぞ。

それにやっぱり……本心から口説かれてるとは思えない。

初回の収録を通して、志波さんの凄さを実感した。

今のような軽い言動とは対照的に、真面目に仕事に向き合う彼は、昔から私が憧れていた姿そのものだ。

だからこそ、軽い気持ちで振り回されて、嫌な気分になった。

志波さんへの憧れの気持ちだが、自分で思っていた以上に強かつたから、彼が根谷さんを誘惑したことにイラツとした。

今の褒め言葉に対してもそう。

志波さんにとつて私は、気安く手を出せる軽い相手ではない。その事実を突きつけられているようで……彼のイメージが私の理想の男性像から離れていく気がして……勝手に憧れたくせに、裏切られたような気持ちになっている。

志波さんは誰に対してもこういう態度なんだと感じて、悲しくなってしまう。

「今日の塚口さんの服装も、よく似合つて——」

「志波さん」

私が彼の言葉を遮つたタイミングで、エレベーターの扉が開いた。

「先日は失礼なことをしてしまい、すみませんでした」

志波さんに向かって深くお辞儀をする。

顔を上げたら、戸惑つた表情を浮かべる彼と目が合った。

「……差し出がましいようですが、一つだけ言わせてください。口説き文句を安売りすると、本当に好きな人ができたときに信じてもらえなくなりですよ」

「……」

「それでは、次回もよろしくお願いします」

志波さんの脇をすり抜けて、エレベーターの外に出る。

しかし、そこは一階のロビーではなかった。見覚えのない薄暗いフロアに、私は立ち竦んでしまう。

「あれ？」

「——ここは二階だよ」

志波さんがエレベーターから降りてくる。

二階フロアは、どうやら使われていないらしい。人の気配が全くなく、奥に見えるガラス扉の向こう側も薄暗かった。

もう一度エレベーターに乗り込もうとしたけれど、少し遅かったようで、目の前で扉が閉まってしまふ。

私は横にあるボタンに手を伸ばした。

「塚口さん」

「きゃっ」

急に肩を掴まれ、身体がフラリとよろめく。

やや強引に後ろを振り向かされて、エレベーター横の壁に背中を押しつけられた。

志波さんが私を追いつめるように、肩の脇に両手を突く。

彼の腕に囲われた格好で、どこにも逃げ場がない。

つていうか近い！ 近いから！

「お、大声を出しますよっ」

すぐそこには階段がある。ここで騒げば上下の階まで響くだろう。

しかし、その必要はなかった。

「この前は、ごめん。……でも後悔はしてないんだ。キスしたかった気持ちは本当だから」

謝罪とも開き直りとも取れる発言に、目をパチパチさせる。

その意味がやつと理解できると、無意識に身体から力が抜けてしまった。

私は小さく溜息をつく。

「——別にいいですよ」

正直かなりショックだった。

でも私は思春期の純情乙女じゃないし、あれがファーストキスでもない。ただの事故だと思えばいい。

「私のほうこそ過剰防衛してしまっ……」

「俺は平気。それより本当に怒ってない？」

「……謝罪してただけなので」

「良かった」

志波さんがホッと表情を緩める。

「じゃ、連絡先教えて。仕事用じゃなくてプライベートのほうね」

ニコリと微笑まれて、つい顔が引きつった。

「……どうやら冗談ではないらしい。」

「ほら、早く。教えてくれるまで放してあげないよ」

そんな無茶苦茶な。っていうか軽いな！

「……強引すぎませんか？」

「なにもしないでいたら、あと二回の収録で塚口さんとの関係は終わる。俺は塚口さんのことをもっと知りたいし、俺のことも知ってほしい。縁を切りたくないんだ。ってことで——」

はいスマホ出して、と美低音の音が言う。

それから少しやり取りした後——私は結局、志波さんと連絡先を交換してしまった。

私みたいな普通女子のアドレスをそこまで知れたがる人が珍しかったというか……手を替え品を替えお強請りしてくる彼に、女心をくすぐられたのかもしれない。

でもそれ以上に、志波さんの押しの強さに負けた。

彼は私が「プライベートで会う気はない」と断っても、「連絡をもらっても返信しないかも」と渋っても、「それでも構わない」とニコニコしていたのだ。

志波さんが満足げに自分のスマホを仕舞う。

私はファイルケースを抱え直し、彼に軽く頭を下げた。

「では会社に戻りますので……」

ところが、別れの挨拶は志波さんに遮られてしまう。

「まだダメ。もう少しだけ、このままで……帰したくないんだ」

吐息がかかりそうなほどの至近距離から、あの魅惑的な声で囁かれる。

そして見つめ合うこと数秒——

「……やっぱり変化なしか」

彼はそう呟いて、私の肩に額を載せた。

ブラウスに溜息がかかる。

「耐性があるのは嬉しいんだけど……効かなすぎて困るなんて想定外……」

「な、なんの話——」

「塚口さん、俺のことどう思う？俺のこの声を聞いても、なにも感じない？」

……声？

それより今は、この体勢をどうにかしてほしい。

直接触れているのは彼の額だけなんだけど、全体的に近すぎるでしょ。恥ずかしすぎていたたまれないよ……！

「志波さん、とりあえず離れてくださいっ」

「嫌だ。答えを聞くまで動かない」

答えて、志波さんの声をどう思うかってことだよね？

「こっ、声は……低くて優しい、素敵な声だと思います」

「それだけ？」

「えっ……えーと……ときどき色っぽい、です……？」

志波さんはやや間を置いてから、はあっと息を吐いて顔を上げた。

「この間『彼氏いない』って聞いたから立候補したいって言ったんだけど、実はラブラブな恋人がいるのか？」

「え、なっ、いませんけど、っ」

「じゃあ、今は仕事が好きだから恋愛に全然興味が湧かないとか？」

「そんなことは……」

「なら」

志波さんの唇が耳元に寄せられる。

「俺のこと、もつと男として意識してよ」

——それは頭の芯に響くような声だった。

今まで聞いた中でも一、二を争うくらいの艶っぽさだ。

「真帆」

「ひゃ……っ」

吐息交じりの美声で名前を呼ばれた瞬間、全身が温度を上げた。
足がフラリとよるめく。

私が膝から崩れ落ちる直前、力の抜けた腰に志波さんの腕が回された。

支えられたというより抱き寄せられたような体勢——それだけでも充分すぎるくらいドキドキするのに、吐息に耳をくすぐられ、背筋がゾクゾクしてしまう。

「名前を呼ばれるのが好きなのか？ 良いこと知ったな」

志波さんは追い打ちをかけるように、私の耳にキスをした。

「んっ」

私は思わず首を竦ませる。

「そんなに可愛い反応されると、理性が飛びそうになるんだけど」

艶やかな声が耳元で囁く。

腰を抱いているほうとは反対側の手が、私の肩に触れた。指先で首筋を緩く撫で、顔のラインまで這い上がってくる。

顎を取られてクイツと上を向かされた。

「真帆、付き合おうよ。……嫌ならちゃんと拒んで」

視線が絡み合う。

熱を孕んだ瞳が瞼で隠れると同時に——唇が重なった。

私の反応を窺うような、機嫌を取るような、優しいキス。強く拒むことも、積極的に受け入れることもできなくて、ギョツと胸を閉じる。ファイルケースが床に落ち、薄暗いエレベーターホールに無機質な音を響かせた。触れた唇が少しだけ離れ、再び重なる。

そのまま角度を変えて繰り返し繰り返された。私を抱く腕の強さや胸板の硬さ、唇に与えられる柔らかな感触。思考がじわじわと彼一色に染まっていく。

やがて彼の舌尖が、そろりと口内に滑り込んできた。

「ん、っ」

思わずくぐもった声が出てしまう。

その直後、唇の内側を舐めるように動いていた舌が、一気に大胆さを増した。

「う、んっ……！ 待、っ……ん、んんっ……！」

咄嗟に顔を背けようとしたけれど、志波さんは放してくれない。

それどころか、ますます積極的に口内を探り始めた。

舌を絡め取られ、ねっとり擦り合わされる。

僅かに開いた唇の隙間から、濡れた音がビチャリと漏れ響いた。

「もっと強く嫌がらないと、調子に乗るけど……良いのか？」

志波さんが腕にグツと力を込め、震える私を更に強く抱き寄せる。

そのはずみで、自分でも驚くくらい甘ったるい声が出ってしまった。

「あ……ふ、っ……！！」

「ヤバイ……可愛すぎ」

艶めいた囁きとともに再開されたキスは、それまで以上に深い。

顎に触れていた手がスルリと滑り、耳をくすぐる。そのまま首筋へと伝い下りた手は、ブラウスの上から胸の膨らみを包み込んだ。

「……ん、っ……やつ……！！」

「声、響くから気をつけて」

短く囁いた志波さんに、また唇を奪われる。

舌の感触に気を取られた途端、胸の膨らみをそつと揺らされた。

彼の大きな手が、まるで形や大きさを確かめるように動く。思わず全身をビクリと跳ねさせると、もう一方の手で腰や臀部をゆったりと撫でてきた。

口内では、肉厚な舌が強引さと甘さを絶妙に織り交ぜながら動いている。

「んっ……は、あっ、んんっ……！！」

あちこちを同時に攻められて、全身がまたたく間に体温と感度を上げた。

……どうしよう。拒めない。

気持ち悦よくて背筋がゾクゾクする。ドキドキして堪たまらない。

鼓動が速すぎて心臓が壊れそう――

「真帆」

艶つやめいた美声を耳に吹き込んだ志波さんが、その唇を首筋すべに滑すべらせる。

何故なにだろう。名前を囁ささやかれると、濃密なキスを与えられるよりも感じてしまう。

胸元へと這はい下りる濡れた舌や、服越しに身体まを弄もる指より……この声に身体たが昂たかまってしまふ。

「真帆……」

「ん、んっ……!!」

遅おそしい身体から伝わる体温が、仄ほかに鼻をくすぐる彼の匂いが、私の理性を奪さらっていく。

もうなにも考えられない――

思考を放棄した私は、震える手で志波さんの腕にキュッとしがみついた。

数分か、もしかしたら十分以上が過ぎてからか。

志波さんに身体を解放されたとき、私の息はすっかり乱れきっていた。

「口紅、取れちゃったな」

唾液だえきで濡れた私の唇を彼の熱い舌がペロリと舐め、ゆっくりと離れていく。

その代わりのように抱き締め直されて、私は志波さんの胸板に顔を預ける。

薄いシャツ越しに彼の鼓動を感じた。

「ん……」

余韻よゐんを味わうような無言の時間が流れる。

状況にぼんやりと身を任せていたら……彼に言われたことが、今更のように頭に浮かんできた。

『付き合おうよ』

その声を思い出すと同時に、耳の奥で別の声が響く。

『真帆ちゃん、俺と付き合わない?』

その言葉で元彼に告白されたときの情景が脳裏のうりを過よった。

大学のサークル仲間だったあの人も、知り合ったばかりの頃にキスを迫ってきた。

私は彼の勢いに押されて初体験まで進んでしまい、事後のベッドの中で短い告白を受けたのだ。

でも……あの人は、いつぞ清々すがすがしくくらいに身体目当てで。

後から気づいたことだけれど、“仲を深める”とか“恋心を育はぐむ”といった精神的な交流は、一

切きらないと思っっているタイプだった。

そんな彼の態度に、私のほうもあつという間に醒さめて、二週間も経たずに別れてしまった。

――元彼の声と志波さんの美声が、頭の中で交互に響く。

二人は言うまでもなく別人だ。

頭の片隅かたすみに残った冷静な部分がそう主張するけれど、混乱のほうが強くて、どうしても二人を重

ねてしまう。

憧れの相手に迫られて、キスされて、触れられて。

今もこうして抱き締められているのに、素直に喜びきれない。

志波さんに、簡単に落ちそうな女、だと思われたことがショックだし、彼が女の子を身体から籠絡するタイプだと知ってしまったことも辛い。

敗北感か、それとも悔しさか、ただ単純に悲しいだけなのか。

マイナスの感情が心の底にヒタヒタと溜まり、胸の奥を少しずつ冷やしていく。

堪えきれず、目頭がどんどん熱を帯びていった。

「……私、男の人からは、っ……相当尻軽で単純な女に見えるんですね」

無意識に零れた呟きに、自分自身が打ちのめされた。

私が泣いているのに気づいたらしい志波さんが、腕の力を緩めた。

「真帆？」

「下の名前、勝手に呼び捨てにしないでください」

冷たい言葉で彼を突き放す。

「私……志波さんに、ずっと懂れてました。高校生の頃、週一のラジオ番組で志波さんの声を聴くのが本当に楽しみだったんです」

褒められて嬉しかった。

抱き締められてドキドキした。

キスされて悦んだ。

彼を受け入れるような態度を取ったのは私なのに、今更拒むなんて自己中だ。

そう躊躇う私が確かに胸の中にいるのに——言葉が止まらない。

「でも幻滅しました……こんなに軽い人だなんて思わなかった……！」

志波さんの視線を感じる。けれど俯いた顔を上げられない。

気まずい沈黙がどれくらい続いただろう。先に口を開いたのは志波さんだった。

「ごめん。泣かせるつもりはなかった」

「……別に、泣いてません……っ」

そう言った瞬間、涙がボロッと零れてしまった。

咄嗟に顔をギョッと閉じる。

しかし一度決壊してしまった涙腺は、ますます目頭を熱くする。

志波さんの胸に抱き寄せられて、僅かに空いていた距離が再び縮まった。

火照ったままの身体は、柔らかな抱擁を心地好いと感じている。

その一方で、こじれた感情はこの温もりをはねのけたいと訴えていた。

「っ……放して、ください……」

志波さんは答えない。

そのことに、安堵と苛立ちを覚えた。

私はどうしたいのか。彼にどうしてほしいのか。……自分でも分からない。頭の中はぐちゃぐちゃだ。

「もう、会社に戻らないと」

涙交じりの声では、それだけ言うのが精一杯だった。

実際、収録を終えてからどれくらい時間が経っているんだろう。会社では午後の業務が待っている。いつまでもここでこうしているわけにはいかない。

それなのに私を抱く腕の力は弱まるどころか、再び強くなった。

「泣かせたまま帰すなんてできない」

「ッ……、勝手すぎます」

私は短く返す。

それ以上なにかを言うと、声に嗚咽が交じりそうだった。

「俺は真帆のこと、凄く真面目な子だと思ってる。これだけいろいろしてるのに、全然なびいてくれないしね」

後頭部に置かれた手が髪を撫でる。その手つきはとても優しい。

「つていうか俺、結構真剣にアプローチしてたつもりだったんだけど……伝わるどころか幻滅されたのか……」

自嘲めいた声が降ってくる。

小さな溜息が私の髪を揺らした。

「言葉を操る職業人として失格だな。……なあ、どうすれば真帆は振り向いてくれるんだ？」

「……それを私に聞くんですか」

「本人から教わるのが一番確実だから」

志波さんはそう囁いたきり、口をつぐんでしまった。

薄暗いエレベーターホールに沈黙が落ちる。

彼に身を任せていると、昂った感情が徐々に落ち着いていく気がした。

「いろいろ……早すぎて、気持ちを追いつかないんです」

ポツリと呟く。

私は志波さんに身体を預けたまま、自分の恋愛観を少しずつ語った。

——気になる人ができたら、まずは仲良くなろうと頑張る。告白して両想いになったら、お互いに距離を縮めて——キスや触れ合いはその後にするものだと思う。

面倒臭い堅物女だと思われてもいい。

チヨロいと思われるより断然マシだ。

「私達、会ってまだ一週間ですよ……一緒にいた時間だけをカウントしたら、たった二時間程度じゃないですか」

なのに関係がここまで進んでしまっているなんて……どう考えても早すぎる。

「だから……『可愛い』って褒められても、甘い言葉を囁かれても、信用しきれないんです」

「時間は関係ないよ。一目惚れすることもある」

予想外な返事がきて、私は思わず上を向いた。

志波さんはこちらをジッと見つめている。

……志波さん、私に一目惚れしたってこと？

最初の『彼氏に立候補したい』発言も、お世辞や冗談じゃなくて本心だったの？

顔にカーッと熱が集まる。

志波さんから目を逸らせない。

……どうしてだろう。

どんな口説き文句より、今の何気ない一言のほうが何倍もドキドキする。

蕩けるような微笑みより、今の真剣な表情のほうがずっと魅力的に見える。

どちらが本当の彼なんだろう……

そんなことを考えながらぼんやり見上げていると、彼がフィットと顔を背けた。視線を落ち着きなく彷徨わせている。

その頬が、ほんの少し赤らんでいるような……？

「涙、止まったな」

「……え？ あ、はい」

「長々と引き止めてごめん」

志波さんがスツと身体を離れた。そして大きな手で躊躇いがちにハンカチを差し出してくる。

そうされて、私はようやく自分の今の状態を意識した。

慌ててバツと俯く。

激しいキスを仕掛けられて口紅が落ちていいる上に、泣いたせいでファンデーションも流れて……かなりひどい顔になっているに違いない。

「次に逢えるのは来週か……その前に連絡するから」

志波さんが足元のファイルケースを拾ってくれる。

私は「すみません」と「ありがとうございます」を繰り返しながらペコペコと頭を下げた。

今更のように襲いかかってきた恥ずかしさのせいで、化粧崩れた顔は真っ赤になっているだろう。そんな顔、誰にも見られたくない。

スツと横に動き、最後にもう一度お辞儀する。

「しっ、失礼しますっ！」

急いで踵を返した私は、カツカツと硬い音を響かせながら、エレベーター横の階段を駆け下りたのだった。

——私は大混乱に陥おぼろっていた。

厳しい日差しも外気の蒸し暑さも気にならないくらい狼狽うろたえていた。

とにかく化粧を直そうと最寄りのお手洗いに駆け込む。

収録後に起きた出来事を思い出して、いろいろな意味で泣きそうになる。グラグラと揺れる気持ちを無理やり呑み込んで、バッグから化粧ポーチを取り出した。

鏡に映る顔は、表情も、メイクの崩れ具合もひどい。

手早く化粧直しを済ませ、改めて自分の顔を見つめる。

「これ以上、深入りしちゃうかも……」

……肌を重ねるばかりで気持ちを置き去りにする関係を……既に大学時代に経験したそれを、二度と繰り返すつもりはない。

志波さんの言葉を心から信じられないくせに、こちらに都合の良いセリフにばかり期待しては駄目だ。

だから私は、深呼吸を繰り返しつつ自分に言い聞かせた。

「大丈夫。一週間あれば気持ちは落ち着くはず」

次の収録までに、この感情に蓋ふたをしよう。

けれどその決意とは逆に、私はこの日から一週間も気持ちを揺さぶられることになる——

3

二度目の収録の翌日。

昼食前に一人でパウダールームに入ろうとした私は、奥から響いてきた声を聞いた途端、その場で立ち竦すくんでしまった。

「——そういえば昨日ねー、二課の塚口さんがちよつと泣いてたんだってー」

二課の塚口さん？ それって私のことだよね……？

「昨日ってラジオの収録日じゃない？ 現場でなにかあったのかな」

「やっぱりそう思う？ 志波さんにこっぴどくフラれたんじゃないかって噂、聞いちゃってー」

「え、ほんと？」

「知らないけどさ、そんな雰囲気だったらしいよー？」

「へー……志波さんって、木梨きなしさんがアプローチしても振り向いてくれなかったんですよ。美人にもなびかない人が塚口さんみたいな普通の子を相手にするわけないのにねえ」

硬直する私のほうへと声が近づいてくる。

どうしよう、このままでは鉢合はちあわせしちゃう……！